

# 鹿鳴館から丸の内へ — ジョサイア・コンドルの東京 —

(株)日本設備工業新聞社  
代表取締役社長 高倉克也

明治維新によって西洋の最先端の知識を学ぼうとする気運が高まった。官庁や学校に招聘された欧米諸国の技師、教師、医師などはお雇い外国人と呼ばれた。イギリスから来たジョサイア・コンドル (1852-1920) もそのひとりだ。

若き建築家のコンドルは鹿鳴館をはじめとする政府関係施設の設計を手がけ、大学の教え子として多くの逸材を輩出した。民間人になってからはみずから事務所を開設し、三菱や三井の大財閥をパトロンとして財界人の邸宅を次々と設計する。丸の内に近代的なオフィス街の原型を築いたのもコンドルの功績だ。

私生活では日本人の妻を娶り、浮世絵、華道、舞踊、造園、落語などに精通して海外に紹介した。日本の文化に対する並々ならぬ造詣は道楽の域を遥かに超えていた。日本近代建築の父といわれたコンドルがいなかったら都市の風貌は現在と違ったものになっていたかもしれない。

## 文明開化の時代の象徴

ロンドンで生まれ育ったコンドルは少年時代に銀行員の父を亡くし、奨学金で商業学校に通った。美術に興味を持ちサウスケンジントン・アートスクールからロンドン大学に進んで建築家を志す。

卒業後はゴシック建築の大家であるウィリアム・バージェスの設計事務所で腕を磨いた。若手の登竜門である王立建築学会ソーン賞設計コンペ

で優勝して一躍脚光を浴びる。

1877年、欧化政策に力を入れていた明治新政府に招かれて24歳で来日。東京大学工学部建築学科のルーツである工部大学校造家学科で教鞭を執る傍ら工部省営繕局顧問として上野博物館や宮内省本館などの西洋建築の設計に携わった。

1883年、外務卿の井上馨の要請で設計した豪華な迎賓館が日比谷に誕生する。当初は外国人接待所と呼ばれた総建坪466坪の鹿鳴館だ。広大な敷地に池と庭園を配し、外観は赤煉瓦造りの2階建てで窓や出入り口をルネッサンス調のアーチ型に統一。2階のベランダには椰子の葉やアラビア模様の透かし彫りの手すりなどインド・イスラム風のデザインも施していた。

内部は1階に談話室、新聞室、ビリヤード場、大食堂、厨房、2階に舞踏室、貴賓室、客室などが配された。3室を開け放つと100坪に及ぶ舞踏室では夜な夜な華やかな舞踏会が開かれ、近代史で鹿鳴館時代と伝えられるほど文明開化の象徴となった。建物の名前を冠した時代はほかにない。

しかし国粹主義者から享楽的退廃の最たるものと非難され、井上の失脚によって鹿鳴館はわずか3年余りで歴史的使命を終える。宮内省に移管さ



ジョサイア・コンドル

れて華族会館に衣替えし、やがて保険会社に売り払われて太平洋戦争前夜に解体された。

## 野原に出現した一丁倫敦

鹿鳴館の建設に際してコンドルは日本で初めて耐震設計を試みた。地質調査や材料の試験を入念に行い、軟弱な地盤にも耐えられる筏地形という基礎工法を導入して関東大震災にも持ちこたえた。基礎をもっとも重視し、鹿鳴館の杭基礎などを解説した著書『造家必携』の序文で「築礎は建築の第一にして且つ最大要目なり」と記している。

斬新なコンドルの発想は弟子たちに絶大な影響を及ぼした。工部大学校の教え子として東京駅を設計した辰野金吾や赤坂の迎賓館を手がけた片山東熊など錚々たる建築家を育てている。工部省との契約終了で工部大学校を退官すると教授の座をイギリス留学から帰国した辰野に譲った。

1888年、新たに自前の建築設計事務所を構え、三菱財閥総帥の岩崎彌之助深川邸や神田駿河台のニコライ堂を設計する。三菱との関係が深まって顧問に就任すると野原だった丸の内にロンドンを彷彿させる近代的オフィス街を整備する話が持ち上がった。

教え子の曾禰達蔵を主任技師に迎え、三菱の副社長にあたる管事の莊田平五郎を交えて基本構想を練り上げる。綿密な打ちあわせの結果、建物の構造は約36メートルの道路にあわせて高さ約15メートルの3階建て赤煉瓦造りと定め、急勾配のスレート葺き屋根をつけることで一致した。

1894年、日本初のオフィスビルとなる三菱一号館が竣工する。館内は19世紀後半のイギリスで流行したクイーン・アン様式で統一された。三菱の銀行部が入居したほか、階段でつながった棟割の物件が事務所として貸し出された。翌年に二号館、さらに三号館が建設され、やがて100メートルの区間に20棟の建物が立ち並ぶオフィス街が形成されていく。ロンドンをモデルにした近代的な街並みは一丁倫敦と名づけられた。

丸の内の成功で名声を高めたコンドルは幅広く注文を請け負うようになる。現存するものだけでも岩崎久彌茅町本邸、岩崎彌之助高輪別邸、岩崎

## 妻のあとを追うように

本業と並行してコンドルは日本の文化・芸術の探究に情熱を注いだ。日本アジア協会に入会し、絵画、舞踊、生け花などの習い事に足繁く通った。「これら繊細優美な芸術の諸分野を長年にわたり寸暇を惜しんで研究してきたが、その真剣さの点で私は一步も人に譲るものではない」と並外れた熱意を吐露している。

とりわけ狩野派の人気絵師・河鍋暁斎かわなべきょうさいに心酔し、弟子となって暁英きょうえいという異例の画号を与えられた。「師の暁斎は私の絵画技術の上達を非常に喜んで、人には『英国の暁斎です』と紹介していました」とたんなる師弟関係を越えた親密な間柄になっていった。コンドルが暁斎の技法を克明に解き明かした著書『河鍋暁斎』によって暁斎は日本以上に海外で評価され、国際的な名声を獲得する。

生け花の分野でも『美しい日本のいけばな』を上梓し、当時の主流であった遠州流を中心に華道の理念や歴史を縦横に論じた。執筆の動機として「いけばなを律する美的法則は単に極東の物珍しい文化ではなく、自然法則を詳しく研究した末に立てた真の美的法則として西洋にも多方面に取り入れられるべきだと強く感じた」と述べている。

妻になる前波くめとは日本舞踊を通じて出会った。湯島天神の町人の次女として生まれ、神田の骨董商の養女となって花柳流の内弟子をしていたくめは師匠の代理で出稽古にコンドルの家を訪れる。それから親しくつきあうようになり、1893年に結婚。コンドルは41歳、くめは37歳だった。結婚を機にコンドルが芸者ともうけたといわれる娘のヘレンを引き取った。

1904年、麻布に自宅を建設する。コンドルの生涯を物語るように洋風と和風が融合していた。

1920年、67歳になったコンドルは病気がちになり、愛妻のくめが看病疲れで6月10日に急逝する。まるで彼女のあとを追うようにコンドルも11日後、脳溢血で息を引きとった。